

公益財団法人 りそなアジア・オセアニア財団 平成 26 年度環境プロジェクト助成
活動報告 (2014 年 5 月～2015 年 8 月まで)

大阪大学グローバルコラボレーションセンター
思沁夫

本報告書では、「モンゴル国オブルハンガイ県オンギ川流域における柳林保護および越冬用飼料（草）の栽培に関する協力活動」の 2014 年 5 月～2015 年 7 月末における調査研究の実施内容を報告する。なお、本活動は現在まで、当初の目的と計画通りに実施されている。

現地における活動内容① (2014 年 5 月 31 日～6 月 9 日)

特に保護対象地域において生態環境調査、白い柳林保護組合（以下、組合と略す）の柳林保護用の柵の設置、植林、組合員の研修、今後の活動に関する打ち合わせを行ったほか、ウランバートルでは事業の社会的発信を目的として、テレビ出演や記事掲載に向けた新聞社との会議、研究者との交流活動に取り組んだ。以下、時系列順に具体的な活動内容を報告する。

2014 年 5 月 31 日午後

モンゴル、ウランバートルに到着

6 月 1 日

ウランバートル市内における複数の植物市場（写真 1）、モンゴル国立大学附属環境教育センター（写真 2）にて、植林用の柳やその他植物及び柵の鉄線や棒の価格などの調査を実施した。環境教育センターの植物園では、苗の販売や植林状況を見学したほか、同センターにおける専門家（ナサンバヤル氏）にセンターにおける教育、市民活動についてインタビューを行った。



写真1 植物市場における調査の様子

写真2 環境教育センター訪問

6月2日

モンゴル国立大学にて研究者及び学生と交流したほか、本事業及びこれまでのモンゴルにおける環境保護活動について講義を行った（写真3）。午後にはモンゴル科学アカデミー国際研究所を訪問し、環境の専門家を紹介いただいた。また、植林に関する情報収集活動も行った。



写真3 モンゴル国立大学における講義の様子

6月3日

ウランバートルから現地（オブルハンガイ県）へ車で移動し、午後6時頃に到着した。

6月4日

組合を訪問し、組合代表者であるネルグイ、組合員とともに会議を行なった。会議では、植林や柵の設置状況、購入材料（植物や鉄線）や植物の生育状況など、これまでの活動内容の確認と保護区周辺環境の実態調査を行なった（写真4、5）



写真4 柵の設置作業の様子（組合代表者提供写真）

写真5 今回設置した柵（1km）の一部（組合代表者提供写真）

植林活動を再確認し、保護区域を調査した結果、以下のことが明らかとなった。

まず、柵の設置に関してである。柵を設置する前には、まず柵の地面で覆われる部分に付着した虫類を火で除去し、良品質の腐敗防止用塗料（外国製）を塗った。モンゴルにおける物価上昇、鉄製品やエネルギー関連の製品の価格上昇に伴い、当初の予定に比べ保護柵設置距離は短縮された。しかし、遊牧民や地方政府の協力のもとで高品質の棒や鉄製の使用（経験上、10年以上の耐久性に優れる）が可能となった。

また、保護区域の生態環境は改善され、保護区域及びその周辺では渡り鳥など様々な動物の繁殖地になりつつある。この変化に関しては遊牧民もあまり意識していなかったため、今後検討の余地がある。加えて、生態環境の改善は植物の生育にも影響を与えていた。遊牧生活を送る上で動植物の保護を意識的に向上させることで、地域の生態環境の役割の拡大が予測された。また、地域で柵設置のための区域調査を行なう途中、大岩に刻まれた岩絵を発見した。遊牧民により既に発見されているものの、現在は重要文化財として保護がなされていない。岩絵は地域の歴史理解を促進する上で重要な役割を担うため、今後の保護対象の一つに挙げられることが協議された。同時に、豊かな自然環境および多様な動植物生態は、環境教育、エコツーリズムの進展に好条件を提供しているため、豊かな自然の変化を多様な視点と角度から考える必要がある。当地域は19世紀におけるツウェルウァンツェグドルジ活仏（環境思想家）の修行地であり、彼の影響は地元の遊牧民らの精神に強く生き続けている。これまで組合代表者及び組合員と協議する中で、地域の歴史的財産の存在と保護はあまり重視されてこなかったが、組合員や地元の人々を協議を重ねる中で、日本など先進国の環境教育、保護のローカル地域の歴史的、伝統文化的な融合、重層的な環境保護の進展という発想につながった。

研修会議や柵設置作業を通じ、遊牧民と組合員の保護概念を地域保全（地域の持続可能な成長）への活動展開に理解がさらに深まった。保護対象領域を単純に柵内だけにとどめず、地域全体に拡大させ、地域の人々の対話と協力の場を広げ、自然環境を保護しつつ、多様な利用方法を通じた人々のニーズを満たすことを検討した点は意義深い。

6月5日、6日

引き続き、保護区域の実態調査を行なったほか（写真6、7、8）、組合員の研修では今後の活動について議論した。特に柳の保護から地域の保護へ、すなわちいかに多様な保護に進展させるか、保護柵の外部における遊牧民の自然に対する保護意識の向上について検討した。



写真6 保護区域に集う渡り鳥



写真7 豊かな植生



写真8 岩絵（約 8000～10000 年以上前に描かれたと推定される）

6月7日

調査地からウランバートルへ移動、午後6時頃に到着した。

ウランバートル到着後、モンゴル通信社の近彩さんと面会した。次年の特集号において、りそな環境事業、組合の活動をはじめとする環境保護活動に関する記事掲載に向けた打ち合わせを行うためである。

モンゴル通信社はモンゴル国営の新聞社であり、国内で唯一、日本語の新聞を発行している。モンゴル在住の日本人のみならず、日本に暮らし、モンゴルに関心のある日本人ビジネスマンや学生、日本に関心があり、日本語を学習するモンゴル人などを読者層に、毎週1000部以上発行されている。このモンゴル通信新聞を通じ、幅広くより多くの読者に対し、組合の環境保護活動について発信する予定である。（なお、2014年5月には既に記事を連載して頂いたことがあるが、テーマは日蒙間の大学教育及び交流活動と環境保護活動の概要であった。）

また、新聞社との会議後、翌日のテレビ取材に関する簡単な事前打ち合わせも行った。

6月8日

午前テレビ局（ETV）、午後ラジオ番組（中国中央ラジオ・モンゴル語放送）の収録を受けた。

まず、ETVでは前夜の事前打ち合わせ事項を再確認し、生放送の収録を行った（写真9）。このテレビ局ではニュース、スポーツ、文化など様々な分野で最新の情報を紹介しており、娯楽に関する番組が多いが、近年は環境問題に関する話題も取り上げており、同テレビ局のディレクター、トゥムルホヤグさんより依頼を受け、収録に承諾した。

約1時間の放送番組ではキャスターからの質問に受け答えする形で、主に以下3点について話した。

- ①モンゴルにおける環境保護活動の意義と課題
- ②組合の具体的な活動事例の紹介
- ③りそな環境事業の概要及び今後の活動予定

収録内容は生放送も含め合計3回放送されたが、放送後に電話やメールの問い合わせを受け、番組内容に対して良い反響が得られた。テレビ放送内容はこちらをご覧ください。<https://vimeo.com/98108199>（モンゴル語）



写真9 番組収録中の様子

同日午後、中国中央ラジオ局のインタビューを2時間半ほど受けた（写真10）。記者は同局取材班のフフチンさんである。このラジオ局では、話題の人物を紹介する特集を組んでおり、外国で活躍するモンゴル人を紹介している。今回は急きょ取材を受けたが、まず初めにモンゴルや中国での環境保護活動の経験を述べ、後半では環境保護活動及び地域の持続可能な成長、りそな事業での具体的な取り組み内容を紹介した。中国のモンゴル語放送で反響を呼び、次回、北京訪問の際には再び取材を受ける予定である。放送内容などの詳細は中国中央ラジオ www.mongolcnr.cn を参照頂きたい。（なお、2014年8月19日北京出張中、内モンゴル日報新聞社においても取材を受け、研究活動の一環として本事業の紹介も行った。）



写真10 ラジオ番組の収録の様子

6月9日 午前

日本帰国

現地における活動内容②（2015年7月および8月）

7月19日、7月20日

この2日間はりそなアジア・オセアニア財団の関係役員2名（廣富 靖以 理事長、仁井 裕幸 専務理事）が現地の環境保護の現状を視察された。

保護の現状 再確認

白柳が継続的に保護され、5.6km 地点までの白柳拡大が観察されたほか、保護柵の修理も一段と進んでいることが明らかとなった。（しかし、2015年はモンゴル全国的に降水量が少ない。このモンゴルの気象条件が、少なからず白柳の生育に影響しているだろうと考えられる）

現地関係者からの報告（生態系の回復および改善）

環境保護組合のネルグイ組合長およびウブルハンガイ県環境保護局長、当地行政担当者らより保護地域周辺（主に河川付近）の生態調査の実施状況とその結果を報告いただいた。

①ネルグイ氏の報告によると、保護地域外の遊牧民たちから冬期用の家畜の飼料提供の依頼があり、保護地域の環境に対する理解と期待を示すと考えられる。

②河川には川ネズミおよび川魚が新たに発見されたほか、組合員が野生ヤギの群れを確認している。ヤギの群れは2009年に確認されて以降、自然災害によって絶滅したと推定されていたが、白柳付近で水飲みをしている様子を観察している。

③白柳のほか、多種の草原きのこ、ブルーベリー、さじ（昨年は12キログラム収穫された。今年も同量の収穫を予定している）などが繁殖、生育している様子、草原の草の種類の豊富さも同時に確認された。



写真 11 川ネズミ、川魚が発見されたツァガンボルガソ近辺のオンギー川



写真 12 さじ

8月1日～8月15日

現地環境に関する実践的教育

現地環境に関する教育に関しては、まず大阪大学 GLOCOL の海外体験型学習の一環とし

て、2012年以降ほぼ毎夏、大阪大学大学院生が当保護地域に宿泊しつつ、環境問題と保護の様子調査研究を継続している。(今年度はズーン・バヤン・ウランソム(群)で行政局長および議会議長と面会した。彼らによると、ソムには全35遊牧民組合があるが、ツァガンボルガソ遊牧民環境保護組合は自立性の観点において、最も特徴があると述べられた。また、行政からの土地提供や、遊牧民組織へのその他支援等の全面的連携・協力が約束された。当地の環境保護活動の今後の発展がさらに期待される。)



写真 13 ズーン・バヤン・ウランソム(群)で行政局での行政局長および議会議長と面会

さらに、2015年夏には保護地域に大阪の小中学生たち数名が宿泊した。ウブルハンガイ県の日本語小学校を訪れ、ツァガンボルガソでの保護について感想を発表、現地の子供たちと交流会を実施した。交流の様子は地元テレビで放送され、地域的、社会的に発信された。最後に、ウブルハンガイ県環境保護局長との会談より、当地の環境保護の事例として、環境教育の題材に使用する旨を話し合った。



写真 14 地元小学生との環境教育および交流会の様子

まとめ

今回の調査では、大きく分けて 3 つの成果が得られたと考えられる。

1. 柵の設置及び研修は計画通り実施されており、組合の環境保護活動に貢献できた。
2. モンゴルにおいて、りそな環境事業及び組合の環境保護活動についてメディアを通じ広く発信することができた。
3. 組合及び地域住民と、ある特殊な目的、すなわち、柳林の保護という環境保護活動から、地域保全（地域の持続可能な成長）へ発展させるという構想の展開を共有することができた。これは今後、地域全体を包括する形で環境保護活動を浸透させ、地域をより良くするための大きな前進を示すものである。
4. 政府と専門家調査によって、生態系の報告があり、回復が確認されたと同時に、地域住民が環境および動物保護の情報を提供していることは、地域の環境教育活動の発展につながっている。